

作詞 勝井源八

作曲 四代目 村屋 六三郎

「摂津の国」と呼ばれる大阪で過ごした、若き頃のおぼろげな春は、夢だったのだろうか。

江戸に出てきて、早や二十年の歳月が過ぎた。色んな事があつたなあ。

何人もの愛しい女にも巡り会えた。書き残そうとしても書き尽くせぬ数々の思い出がある。そして今は実りの秋、錦繡に彩られた紅葉の山々を越えて、私は故郷・大坂へ、錦を飾りに帰る途中なのです。

ああ、思い出すなあ……

薄い紫色に咲き初め、春に咲き、夏にも咲き、何度も咲く

松の花のように咲く君は、その松に絡むように
ぼくにくっついて離れない藤の花のようだね。

君が人目を掻き止めるようにかぶっている網傘は、黒塗の笠で、肩に振りかけた藤の一枝は、

紫草が生い茂る玉川上水を引き、山王の溜池にたどり着く、

長いみちのりの江戸の水道のような、オレの「江戸紫染め」の水に
ずっと染まってるれいしと、「江戸紫」のぼくどの秘めごとが愛しいのか、

「い」の文字を、いいいい、と十個書いて、中線でしゅつと、通して書いて、
藤の花を描いてくれた、そんな藤の枝だろ?

エ、どうなの? しょうがない娘だねえ。

ちよつと、

裾がちらちら乱れているよ、色っぽいけど。

滋賀にある鏡山じゃないけれど、鏡に写して見てごらん。

人の姿をどうこう言うより、自分の姿を顧みる目がないとダメよ。

鏡がないからと、琵琶湖の水鏡に映すのは

女の子としては、ちよつと恥ずかしいよね。

(女)

男心の憎いののは、

栗津街道の晴嵐のように、強く「会わないで」って約束しても、

三井寺の鐘になぞらえて、「予ねてからの約束」だから、

「もう、ほかの女には神かけて、会わない」って言っておいて、

なんで、あなたの石山寺の観音様にかけた、堅い誓いは破られるの。

私の心は蟬の抜け殻のようだね。

辛崎の夜雨に空っぽの心で待つような、こつちは辛い夜だと云うのに、

どうしてあの女と、比良山に積もった雪が融けるように打ち解けて

逢瀬をぶり返すのよ。ああ、メツチャ姫らしい。

よくも口車に乗せてくれたわね。

瀬田の夕焼けみたに顔を赤らめて嬉しがった、

私はまるでバカじゃない。

堅田の雁にも託そうと、出した手紙は片通行で、今日も返事は来ない。

矢橋の港に舟は戻っても、やっぱし私の心は戻らずに恨みごとばかり。

(女)

松を植えるなら、有馬の里にお植えないな。

松なら長生きだし、わたしとあなたの仲もいつまでも変わらないわよ。

それに有馬の湯女の「お藤さん」のようにしてあげるわ。

だあから、襦をつまんで歩いたら、足に裾がからみつくでしょ。

からみついて、もつれあって、まだ足りずにわたしと寝たいの?

宵のうらからわたしと寝ていたじゃないの?

藤に巻かれて寝たいって?

ふーん、なんかねえ、どうしよつかない

下になるわたしの枕は、あなたの両手が枕ってこと?

さあ、暮だよ!

空も霞んで夕日に照り映え、名残は惜しいが、雁も帰る頃だつ、

お江戸の皆さん、いつかまた……



【藤音頭】

藤の木には、お酒を遣ると良いって云うから、

藤の花房が色々、長く咲くように可愛がつてあげようと、

お酒を買って、わたしもちよつと飲んで、その藤の木に飲ませたら、

わたしの男に絡んで絡めて、

こともあろうに、「松の花の十回・返り咲き」って名乗ってき、

憎たらしいつらありやしない。

「かえる」って言葉は「帰る」って言葉に通じる忌み言葉よ。

花はしゃべらないってことは、知ってますけどね。

松の花でなし、あなたは藤の花でしょうよつ。

知らん振りしてひとの男に絡みついて、どういうつもり、

堪忍「ならぬ、今日」は、だぞ。

ちよつと、わたし、酔っ払ってますよくだ。

えっ?

杉にすがる女も好きずき、松のぼくにまどわる女も好きずき、

好いて好かれて離れぬ仲は、いつも緑の常盤木のような

君とぼくのことだよだつて?

そんなら、帰らないで居てくれるの?

エヘッ、嬉しい。わー、うれちい。

平成三十年一月十二日

竹芝乃比呂 拙訳

【注釈】

1. 十返り

松の花は長期に渡って咲くことから人々は「十回も返り咲く」と表現した。

2. 水道

江戸は湿地に開かれた都市である。東京湾の塩分を含む土地では飲料水の確保に苦しんだのである。そこで、往時の技術者は利根川の治水により

江戸への河川の流量を抑えて関東平野(湿地)を徐々に干し上げる

とともに、乾地になった江戸の町へは玉川から水を引いてダムを造り、

そこから地下に人工の水道を構築したのである。ダムは山王の地に造成

され、現代も「溜池山王」という地名が残っている。

絵師集団である葛飾北斎、即ち、「チーム北斎」による江戸八景の絵の中に

高さ十メートルもある堤防の溜池が描かれている。

3. 鏡山

滋賀県にある山で、そのふもとは東海道宿場「鏡宿」があった。この言葉自体は歌枕となっている

4. 三井

近江の国にある三井寺を指す。続く「かねごと」は三井寺の鐘と「予ねて」

との語呂合わせである。藤娘のモチーフは「大津絵」である。大津絵とは

江戸時代に近江の国「大津」(地名)で売り出した戯画であり、藤娘の

いでたらは、衣の片袖を脱ぐ絵姿と同じくしている。その大津絵は三井寺

付近で売られていて、東海道を往来する旅人の土産として買われ、全国に

広がった。時代が下ると、大津絵の画題は人気絵種の「外法梯子刺」

「鬼の念仏」「雷と太鼓」「瓢箪絵」「魔匠」「槍持奴」「釣鐘舟慶」「座頭」

「矢の根五郎」そして「藤娘」の十種に整理されたと言う。

5. 石山、6から崎、7比良、8瀬田、9堅田、10、矢橋

4. の三井以降は近江の国の景勝地である「近江八景」を指し、粟津晴嵐

(あはづと・・) 三井晩鐘、石山秋月、唐崎夜雨、比良兼雪、瀬田夕照、

堅田落雁、矢橋雁帆、と書いて、特筆の風情を示している。即ち、粟津原

に晴れの日にも吹く強風、三井寺の晩鐘、石山寺に見る秋の満月、唐崎に

夜に降る雨(唐)は「辛い川つらい」と掛けである、比良山系の残雪、

瀬田の唐崎(地名)に映える夕焼け、堅田(地名)の夕空に飛翔する雁の

群れ、矢橋(地名)は、船に乗り対岸に達すると東海道の近道になること

から、古くから琵琶湖岸の港町として栄え、そこに帰ってくる渡船のこと

である。いずれも近江地方の地名と合わさっている。

11. 12. 小枕、お手枕

小枕とは木製の箱枕に付けて頭を受ける、蕎麦殻などを詰めた袋である。

手枕とは、肘枕のことを指すが普通だが、「お」が付いているので、

女の方からすれば「あなたの腕枕」、即ち、男の手と腕を指すのである。

おのずと、女を下にして男がかぶさって、女の頭を男の両の手で受け、

見つめ合う男女の体位となる。

だから、その文脈は、女は、ちよつと恥じらい、その意を知る作詞者は、

急に唄を閉じて、「オシマイ」と宣言するわけである。

13. 常盤木

一年中、緑葉を保つ、松や杉などの常緑樹

